

第4部 近代初期における通貨と信用の結婚と離婚 あるいは、信用創造の拡大と崩壊

2021年6月22日

名古屋大学 経済学研究科 齊藤 誠

貸借(信用)と通貨の進化

- 3つの大きな流れ(貸借から通貨へ、コイン自身の進化)
 - 公共空間での**貸借** ⇒ **通貨**としての割符(4月27日、5月11日)
 - 公共空間での銀行を介した**貸借** ⇒ 私的空間での預金**通貨**(小切手、手形、為替)(6月1日)
 - コインの進化:**鑄貨**(部分的な貴金属の内在価値) ⇒ **トークンコイン**(内在価値のない硬貨)(6月28日)
- 信用創造:銀行を介した信用と通貨の再遭遇
 - 必ずしも、預金銀行=貸出機関ではない。
 - 決済専門の預金銀行もある。
 - 17世紀末から18世紀初にかけて信用創造の拡大と縮小が見られた。

ゲーテ『ファウスト』の場面から 信用創造の文学的記述・・・

ファウスト 悲劇 第一部(1808年出版)

ファウストの死後の魂を担保とした悪魔との約束

- **ファウスト**: そうかといって、財物もなければ金もなく、人に崇められもせず、栄耀の味も知らぬ。
- **メフィスト**: そんなら、この世であなたにお仕え申して、何事も仰せの如くに立ち働きましょう。けれども、あの世でお会いしたら、今度はあなたが私の家来なる、というのはいかがです。
- **ファウスト**: 間違いあるまいな。己がある刹那に向かって、「とまれ、お前はあまりにも美しい」といったら、己はお前に存分に料理されていい。己は喜んでっ滅んで行く。

「語られた約束」から「(証人のいないもとで)書かれた約束」へ

- **メフィスト**: では早速今日の新博士の祝賀会で、あなたの下僕としての勤めを果たすことに致しましょう。けれどもただ一つだけ、念のために、ちよつと一筆書いておいていただきたいのですが。
- **ファウスト**: 証文？うるさいことをいう奴だな。君は男子というもの、男子の一言というものを知らないのか。己が一旦口にした言葉は、俺の生涯を束縛する。(中略)
- **メフィスト**: 何も先生、そうむきになって、大げさな言葉遣いをなさらなくてもいいでしょう。あり合せの紙切れで結構なのです。署名は血を一滴出してお願い申したいので。

ファウスト 第二部(1833年出版) 皇帝の居城 王座の広間 帝国の財政危機

- **大蔵卿**: 金の流入口はふさがれてしまいましたので、銘々で引っ掻いたり、掘ったり、寄せ集めたりで、国庫はいつも空なのでございます。
- **メフィスト**: この世の中に、不足のないところはありません。これがない、あれがない。ところで陛下はお手許不如意でいらっしゃる。お金と申すものは床にやたらに落ちていたりするものではございませんが、知覚才覚さえございますれば、ごく深いところから掘り出して参ることも出来ぬ相談ではございませぬ。深山の鉱脈、壁の中、そんなところに金貨や棒金が見つげ出せるものでございます。それでは、誰がそれを取り出してくれるのかとおたずねなさいますならば、それは有為な男の資性と精神の力であると申し上げねばなりませんまい。
- **宰相**(大司教を兼務): 資性と精神とな——キリスト教徒に向かつていうべき言葉とは受け取りかねるわい。
 - 「無から有」を生み出す錬金術師のまねごとを神への冒瀆と受け取った。

遊苑へ

一体全体、何が起きたのか？

- **皇帝**: 進言、助言は聞き飽いた。金がないのだ。作れるものなら作ってみよ。
- **メフィスト**: 御所望通りに仕りましょう。いや、御所望以上にお作り申上げましょう。
 - しばらくたって...
- **宮内卿**(急ぎ登場): 支払いという支払いが悉く相済みまして、高利貸も詰めを引っ込めてしまったのでございます。地獄の責苦を脱することができました。天国といえどもかほどに愉快でございますまい。

誰も約束していない約束

- **宰相**: 長生きは致すものでござりまするなあ。まずこの重大至極の文書の内容をお聴き取り上、とくにご覧下さいまし。この文書がすべての禍を転じて福となしたのでございます。(文書を読みあげる)

「知ラント欲スル万人ニ布告ス。コノ紙片ハ千クローネ紙幣トシテ通用スベキモノナリ。帝国領内ノ地中ニ埋メラレタル無数ノ金銀財宝ヲソノ担保トナス。コノ無尽ノ財宝ハ直チニ発掘セラレ、兌換ノ用ニ役立タシムベキ処置ハ講ゼラレタリ」

- **皇帝**: そのような詐欺、瞞着の所行が許されようか。余が筆蹟に似せて署名を致したのは誰か。かかる重大な犯罪が見過されておるのか。

約束していない約束の大量複製、 そして回収されない約束

- **大蔵卿**: お忘れてございますか、親署遊ばされたではございませんか。昨夜のことでございます。陛下はパンの神(牧神のこと)に仮装せられまして、宰相が私どもと一緒に御前に罷り出で、こう奏上仕ったではございませんか。「この盛大なる御祝祭のお喜び、人民の幸福を嘉せられて、一筆御願ひ申上げます」陛下は墨痕もあざやかに御認め遊ばし、その御親書を、昨夜のうちに奇術師をして何千枚にも致させました。御仁慈が遍く等しく及びますようにと、あらゆる種類の紙幣に御親署を捺印し、十、三十、五十、百クローネの紙幣が出来上がりましたのでございます。
- **宮内卿**: 飛び散ったものを回収は出来ませぬ。あっという間にちらばってしまったのでございます。両替屋の扉は一杯に開かれっ放してございませぬが、と申しますのも、むろん割引の上で、紙幣を金貨や銀貨に換えて、払出しをしておるからでございます。
 - 事実上の兌換...

預金通貨の発展と 信用創造の展開

2021/6/22

文書による貸借の約束

- 預託証書から預金証書へ
- 預託業としての金融仲介業
 - 財貨を預かった商人が預託証書を預け人に対して振り出す。
- 預金業としての金融仲介業：信用創造の瞬間！
 - 財貨を預かった銀行は預金証書を預金人に対して振り出す。
 - 預金人は、預金証書を通貨として支払いに用いる。
 - 銀行は、預かった財貨を他人に貸し付ける（信用の創造）

新しい信用創造の形

- 中世的な信用創造

- 金融仲介業は、預け入れられた財貨を貸出原資とした。
- 教科書的な信用創造メカニズムに近い。
 - 貸出されなかった財貨 \equiv 中央銀行の準備預金

- 近代的な信用創造

- 近代的な金融仲介業(中央銀行を含む)は、貸出と預金(通貨)を同時に(債権債務の両建てで)創造することができるようになった。
- 金融仲介業が貸し出したプロジェクトが破綻をすれば、預金通貨の価値が暴落する。
- 個々の金融仲介業が行う信用創造の規模を制御することは非常に難しい。

「文書による貸借の約束」と信用創造

金融業の資産

他人に貸し付けた
財貨(貸付証書)

⇒新たな信用の創出

依然として蔵で預
かっている財貨

金融業の負債

振り出した
預金証書

⇒通貨として流通

近代的な信用創造（民間銀行の場合）

民間銀行の資産

貸出債権の拡大

⇒新たな信用の創出

民間銀行の負債

貸出先の預金口座に
貸出資金を振り込む

⇒預金は
通貨として流通

近代的な信用創造(中央銀行の場合)

中央銀行の資産

国債の直接引受

⇒新たな信用の創出

中央銀行の負債

紙幣(中央銀行券)を
発行し国庫に引き渡す。

⇒紙幣は通貨として
市中で流通

古川顕「H.D.マクラウドと信用創造論の系譜」を読んでいこう。

• 高田保馬『貨幣の理論』

- 高田保馬は、『貨幣の理論』において「信用」を一般的に次のように定義する。「信用は(交換経済的な給付に対する) 反対給付の猶予である, 詳言すれば, 経済価値の譲渡という反対給付の猶予である。もし, 支払いということを広義に用い, 貨幣譲渡にのみ限らないときには, 信用は支払いの猶予と言い得る。しかもこの猶予は, これを猶予するものの側において, 相手がある期間の後に必ず反対給付を実行すると期待をもち, 相手を信認することに基づく」(高田[1931] 124頁)。そして「反対給付において引き渡されるべきものは商品の一定数量であることもできるが(実物債務におけるごとく), 一般的事実としては一定数量の貨幣量である(名目債務)」(同128129頁)として, 「一定の貨幣量の支払いの猶予」を「狭義の信用」と定義し, こうした狭義の信用を供与し, 預金通貨を供給する主体としての銀行の役割について次のように述べる。「銀行は蓄積された資本の仲介者として信用を与えることができる。これは仲介信用と称せられ得る。また銀行に授与されない(または自ら蓄積した資本に基づかない), 自ら創造した信用を与えることができる。これを創造信用または添加信用という」(同133頁)。換言すれば, 「銀行は債務者すなわち信用を与えられる主体の代位者として立つ」(同頁)ともいえるのである。

信用創造の2つの考え方(その1)

通貨主義: 預金 ⇒ 信用

- Leaf (1926)

- 銀行は自分が借り得る以上のものを貸し出すことはできない。否, 実際には借りた金額の限度まですら貸し出すことはできない。預金銀行制度において, もし“信用の創造者”と呼ばれるものがあるとすれば, それは銀行ではなくて預金者である。なぜなら, 銀行の貸し出しは, 預金者が銀行に預けている金額によって厳格に制限されているからである。

信用創造の2つの考え方(その2)

銀行主義: 信用 ⇒ 預金

- マクラウドの信用創造論

表1 銀行のB/S
(単位: ボンド)

資産		負債	
現金	10,000	預金	10,000
計	10,000	計	10,000

表2 銀行のB/S
(単位: ボンド)

資産		負債	
現金	10,000	預金	10,000
為替手形	40,000	預金	39,600
		利潤	400
計	50,000	計	50,000

- マクラウドは以上の事例に基づいて、銀行は当初に預かった預金の数倍の収益資産の購入(手形の購入や貸し出し)を行なうことができると主張し、「銀行家は他の負債を創造することによって貨幣および負債を購入する取引者である」(Macleod (1902), p. 326, 傍点は原文ではイタリック)と述べたうえ、「“銀行”および“銀行家”の基本的で顕著な特徴は、要求に応じて支払うことのできる信用を創造し発行することである。そしてこの信用は流通に投入され、貨幣のあらゆる目的に役立つよう意図されている。銀行はそれゆえ、貨幣を貸し借りするための店舗ではなくて、**信用の製造所** (a Manufactory of Credit) である」(Ibid., 傍点は原文ではイタリック) というのである。

信用創造に限界はあるのか？

- ケインズの考え方

- ケインズはまた次のような重要な指摘を行なっている。「すべての支払いが現金でまったく用いられない国で、外部の世界とは何の関係も持たない封鎖的な銀行組織を想像し、さらにまた、このような事情のもとで銀行はすこしも現金準備を保有している必要を認めず、銀行相互間の債務は[現金以外の]他の資産によって決済すると仮定するならば、それらの銀行が歩調を揃えて進むかぎり、何らの限界もないことは明らかである」
- 決済手段として貨幣を必要としない経済であれば、信用創造に限界はない。
 - しかし、人々は貨幣を必要としている...

信用創造に限界はあるのか？

• ヱイクセルの考え方

- ケインズの主張に先立って、ヴェクセルは『利子と物価』で次のように述べている。少し長いが引用しておこう。
- 「銀行の手に手元現金を統一し、貸付業務を集中することによって、また手形と銀行券、あるいは小切手と手形交換を利用することによって、理論的には無制限な貨幣の運動力を阻害しているいろいろな実際的障害が事実上次第次第に排除されてゆくのである。貨幣はますます流動的となり、貨幣の供給はますます需要のいかなる任意の大きさにも順応することとなる。さらに繰り返して述べた理想的状態においては、一切の支払いはしたがってまた一切の貸付業務も小切手および振替取引の手続きをもって営まれるのであるが、そこではもはや、貨幣の供給を独立のものとして、すなわち貨幣に対する需要とは異なった数量として論じることは不可能である。
- 銀行において需要されるだけの貨幣は、また銀行によって借り手の堅実さを前提とすると貸し出されることができる。この場合、銀行の行なうことは実際ある数字を借り手の勘定へ承諾された信用、すなわち仮構の預金として記入するだけである。そのうち、この預金に当てて振り出された小切手が銀行に提示されるならば、銀行はこの小切手の額面金額を小切手所有者の勘定の貸方に、預金の払い込み（またはその人の債務の弁済）として記入する。かくて「貨幣の供給」は、需要そのものによって創造されるのである」
- 以上のヴェクセルの指摘は、銀行側の信用創造能力は、論理上は無限であるというケインズの主張と同様であるのみならず、その信用創造能力は貨幣に対する人々の需要によって決定される点を明確に述べている点で非常に興味深い。

池尾和人『現代の金融入門』(ちくま新書)

- なるほど、個々の銀行のレベルでは、信用⇒預金
 - 銀行の提供する要求払い預金は、それ自体が決済手段(すなわち、貨幣)として使えるものとなっている。このために、銀行は「信用創造」と呼ばれる特殊な機能をもつことになる。**信用創造機能とは、貯蓄の形成を先取りするかたちで、先行して資金の貸付を行う働きのことである。**
 - 銀行が貸出を行う場合、窓口で現金を手渡すのではなく、貸出金をその銀行に設けられた借り手の預金口座に振り込むかたちをとる。すなわち、銀行からみれば、貸出とは、直ちには貸出額に相当する数字を預金口座に記入することに過ぎない。**したがって、この限りでは紙とインクさえあれば、銀行は、いくらでも貸出を実行できることになる。**

池尾和人『現代の金融入門』(ちくま新書)

- しかし、経済全体のレベルでは、預金⇒信用からの制約も
 - 信用創造が可能であるのは、**銀行の貸出金の大部分が直接・間接に預金の形態のまま保有されることになる**からである。このとき預金を保有する主体は貯蓄を行っているのだという点は、忘れられてはならない。先に信用創造について「貯蓄の形成を先取りするかたちで」と述べたのは、この点を示唆するためである。
 - 換言すると、**信用創造は、無から有を生じるものではなく、貯蓄の先取りに過ぎない**。それゆえ、銀行部門の行う信用創造の大きさが、非銀行部門の意図する貯蓄額を上回るものであれば、いわゆる「貨幣の過剰、資金の不足」という事態に陥ることになり、銀行は予定以上の現金流出に見舞われるか、インフレによる強制貯蓄(消費の抑制)の発生がみられることになると考えられる。

ミクロの視点とマクロの視点

- 個々の銀行レベルでは、
 - 信用が預金を創出している！
- マクロ経済レベルでは、
 - 信用創造の規模が、貯蓄からなされる預金(通貨)によって制約される。
 - 信用創出によってなされた設備投資の総額は、貯蓄の総額に常に等しい(貯蓄＝投資)。
- 銀行実務に近い人々が銀行主義の立場をとり、経済全体を俯瞰する立場の人々が通貨主義の立場をとったが、両者は決して相矛盾するものではない。

信用創造の暴走 ミシシッピバブルを事例に

時代を少し遡ってみよう！

- 19世紀半ばから20世紀初頭にかけての通貨主義と銀行主義の論争
- 19世紀初めに公刊されたゲーテの『ファウスト』
- この対立の根っこ、特に、ゲーテの解釈や通貨主義の立場には、17世紀終りから18世紀初頭の英仏経済の苦い経験がある。

17世紀から18世紀初頭、戦争に明け暮れる欧州の王たち

- 1618年から48年、ドイツ30年戦争
- 1648年、ウェストファリア条約(30年戦争の終結)
- 1652年から74年、**英**蘭戦争
- 1667年から68年、ネーデルランド継承戦争(**仏**西戦争)
- 1672年から78年、**仏**蘭戦争
- 1683年から84年、再統合戦争(**仏**西戦争)
- 1688年から97年、大同盟戦争(九年戦争、**フランス**ルイ14世対アウクスブルク同盟、プファルツ戦争、ウィリアム王戦争)
- 1700年から21年、北方戦争(ロシア対スウェーデン・デンマーク)
- 1701年から13年、スペイン継承戦争(**フランス**対オーストリア・**イギリス**・オランダ)
- 1713年、ユトレヒト条約
- 1740年から48年、オーストリア継承戦争(プロイセン・**フランス**対オーストリア・**イギリス**)

17世紀から18世紀初頭、戦争に明け暮れる欧州の王たち:たとえば、フランスの軍事支出

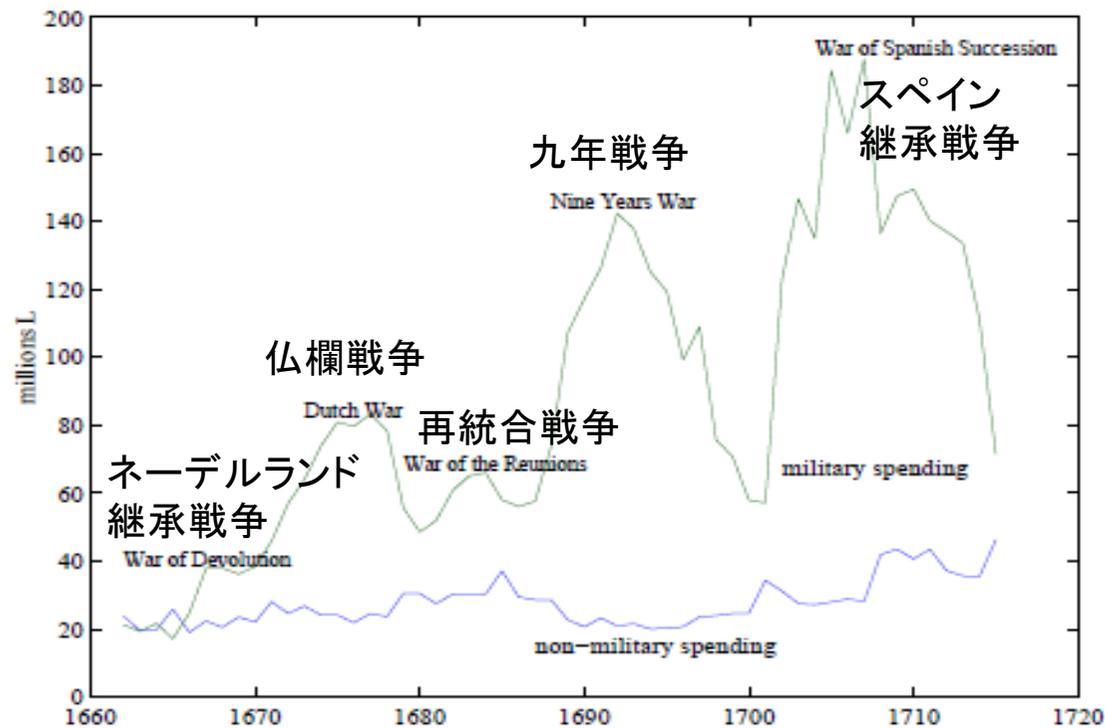


Figure 1: Military and non-military spending in France, 1662–1715 (debt service excluded).

ジョン・ローのイギリスの経験からの着想

• 17世紀末のイギリスの状況

- 国家債務の膨張への対応
- 決済手段(通貨)の不足への対応

イギリスの対応

- 国家債務膨張への対応：南海会社株による政府債務とのスワップ
 - 1711年、南海会社(南米の奴隷貿易の独占を目的とした特許会社)による政府劣後債と南海会社株の交換
 - 家計：(資産)政府劣後短期債 ⇒(資産)南海会社株
 - 南海会社：⇒(資産)政府劣後短期債(負債)南海会社株 ⇒(資産)政府長期債への転換
- 決済手段の不足への対応：ロンドンのゴールドスミスやイングランド銀行による信用創造
 - 1694年、政府への融資の見返りに紙幣を発行するイングランド銀行の設立、政府への融資は、基本的に政府の徴税権によって担保された。
 - 家計：⇒(資産)イングランド銀行券
 - イングランド銀行：⇒(資産)政府への融資(負債)イングランド銀行券

ロー・システムの解剖(その1)

- 通常のケース
 - 政府の徴税権収入で返済できる範囲で国債を発行する。
- ロー・システム: 王立銀行による信用創造
 - 王立銀行が政府債務を引き受けることによって、政府は**王立銀行券**(紙幣)を得る。
 - 王立銀行券発行量は、1719年4月、38百万リーブル、1720年4月、2,054百万リーブル。
 - 政府は、新たに得た**王立銀行券**で既発国債を繰上げ償還する。
 - 国民は、政府に国債を買い戻してもらう代わりに**王立銀行券**を得る。
 - 国民は、新たに得た王立銀行券で**ミシシッピ会社株**を購入する。

ロー・システムの解剖(その2)

- ロー・システムの積極展開(1719年8月より):ミシシッピ会社株と国債のスワップ
 - 国民は、保有する国債(政府劣後債)をミシシッピ会社株と交換する。
 - すなわち、ミシシッピ会社は、国債を担保にミシシッピ会社株を発行していることになる。
- ロー・システムの崩壊(1720年後半から)
 - ミシシッピ会社株の暴落でミシシッピ会社は保有している国債で自己株式買取を行う。
 - 1721年、ミシシッピ会社破綻。
 - 政府も、王立銀行券発行から国債再発行へ切り替える。

ローの戦略(1)

変則的な統合政府の誕生: 中央銀行機能(王立銀行)、投資機能(ミシシッピ会社)、政府機能の合体

- 1716年、ローは、バンク・ジェネラル、発券銀行として設立
- 1718年、バンク・ロワイヤル(王立銀行)、金兌換券の発行、王立銀行券(紙幣)による納税
- 1717年、ローによるミシシッピ会社の買収
- 1719年、ローは、徴税権の取得
- 1720年2月には、王立銀行とミシシッピ会社が合併

ローの戦略(2)

ミシシッピ・スキームによる国家債務の返済

• 王立銀行による信用創造

㊦王立銀行:(資産)政府への融資(負債)紙幣

㊧政府:(資産)紙幣(負債)王立銀行への負債

⇒(資産)(-)国債返済による国民への紙幣の支払(負債)(-)国民保有の国債の償還

㊨国民:(資産)国債 ⇒(資産)紙幣

㊩ミシシッピ会社:⇒(資産)紙幣(負債)ミシシッピ会社株の発行

㊪国民:(資産)紙幣 ⇒(資産)ミシシッピ会社株の購入

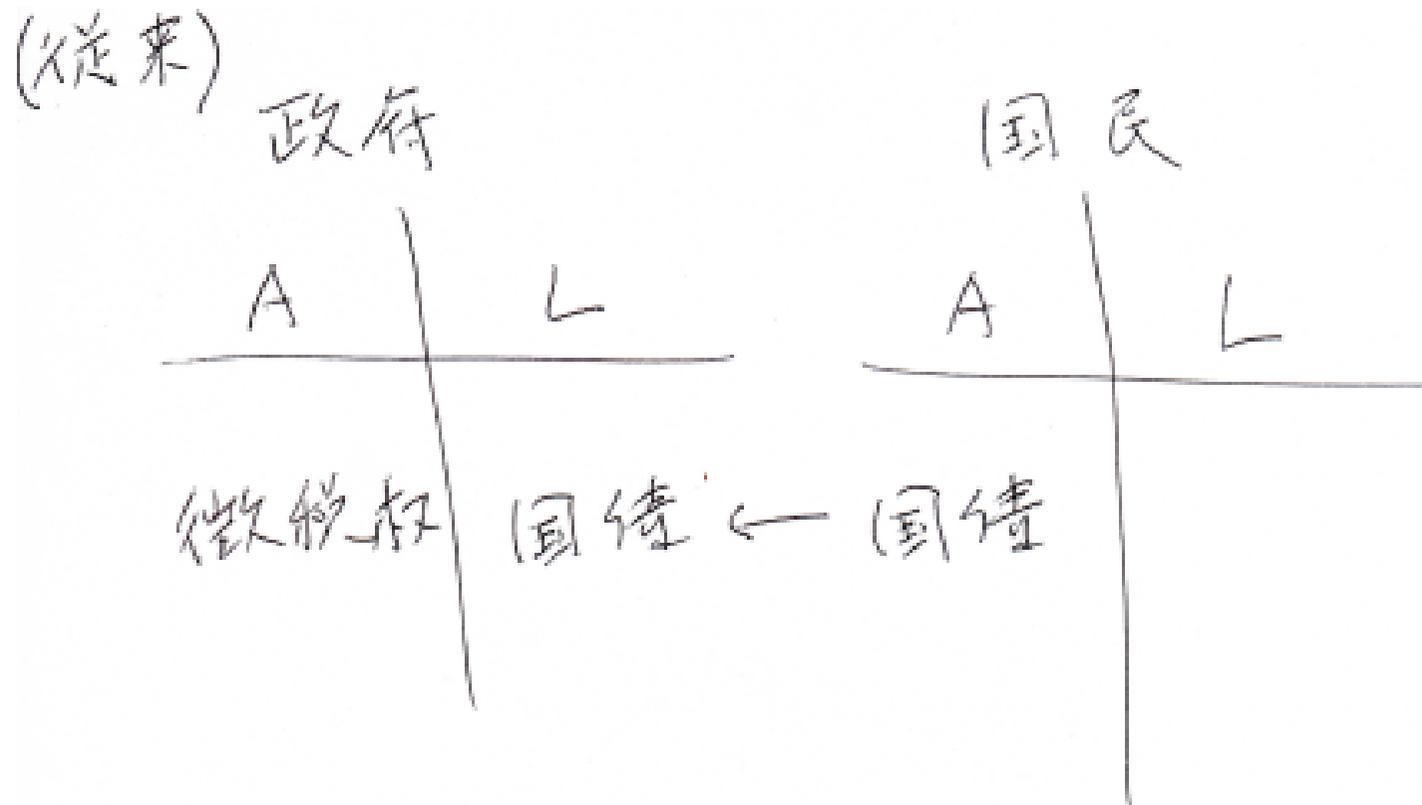
ローの戦略(3)

- ミシシッピ会社株と国債のスワップ、1719年8月から

⑦国民:(資産)国債 ⇒(資産)ミシシッピ会社株

⑧ミシシッピ会社:⇒(資産)国債(負債)ミシシッピ会社株

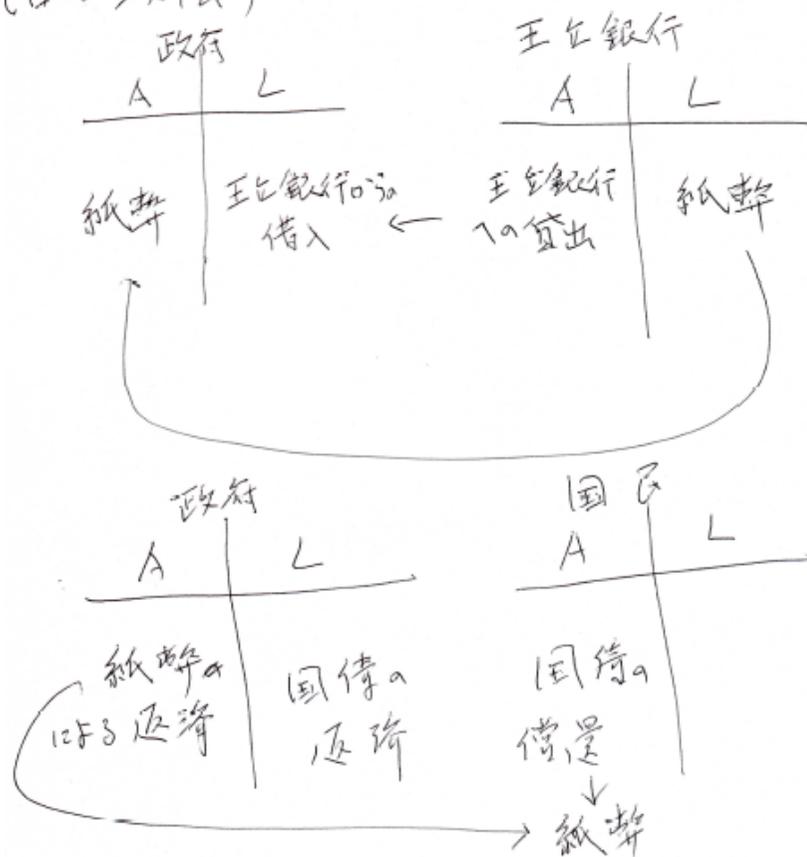
従来のシステム



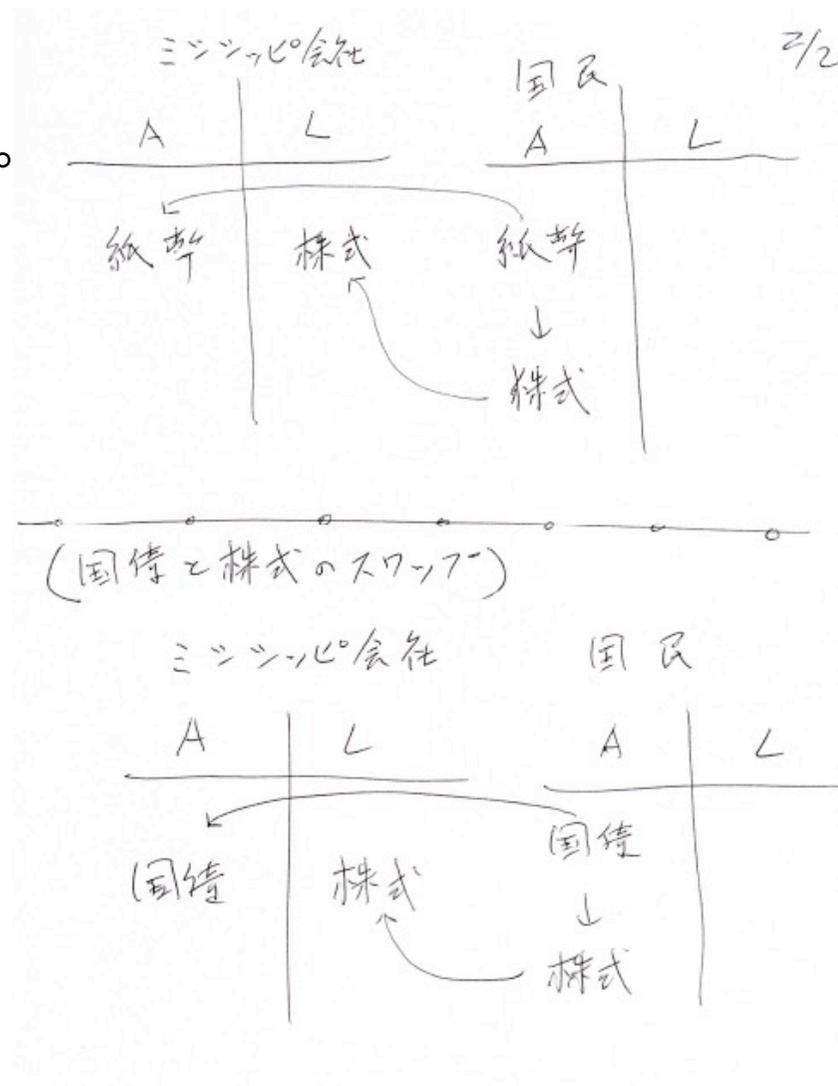
ローのシステム

統合政府債務(国債や紙幣)をミ社株に置き換える。

(ローのシステム)



2021/6/22



口一の戦略(4)

- **紙幣の国債への再転換、1720年後半から**

① 王立銀行：(資産)(-)政府への債権(負債)(-)紙幣

② 政府：(負債)国債

③ 国民：(資産)紙幣 ⇒ (資産)国債

ロー・システムの 帳尻は？

- フランス国債の正味価値は減ったのであろうか？
 - 正味価値＝名目残高×銀平価
 - 1715年9月: 28億ルーブル×1.78＝**50億ルーブル**
 - 1720年5月: 20億ルーブル×0.60＝**12億ルーブル**
 - 1724年10月: 25億ルーブル×1.20＝**30億ルーブル**
- 確かにロー・システムの全盛期は、国債を**紙幣の増発**(あるいは、平価切下げ)と**ミシシッピ会社株の新規発行**に置き換えることができたが、システムの崩壊後は、再び国債に依拠せざるを得なかった。
 - ミシシッピ会社株は水泡に帰し、紙幣は回収、あるいは、増価(平価切上げ)せざるを得なかった。

統合政府から見たロー・システム

- 統合政府とは？
 - 政府＋王立銀行＋ミシシッピ会社
- 統合政府の資産とは？
 - 徴税権と植民地からの独占収入権
- 統合政府の負債とは？
 - ロー・システム以前：国債
 - ロー・システムの展開：国債⇒紙幣、国債⇒ミシシッピ会社株
 - ロー・システムの崩壊：紙幣やミシシッピ株式株⇒国債
 - ただし、一部の国債は物価上昇で減価した。

ミシシッピ会社株価

2021/6/22

銀のルール建て国際相場

- Mint price (MP), minting point
- Mint equivalent (ME), melting point
- 「**MP < 銀の価格 < ME**」だと、銀地金を仏銀貨に換える方が得。
- 「**ME < 銀の価格**」だと、仏銀貨を銀地金に換える方が得。
 - 1720年6月から1721年にかけて、仏銀貨は保有する価値がなくなった。

商品市況の動向

- 物価水準は、1720年代半ばには、1710年代半ばの水準に戻っている。
 - しばしばいわれるようなハイパーインフレになったわけではなかった。
- フランス王政は、国債を物価高騰によって償却したわけではなかった。
 - 国債の実質残高は、従前の水準に戻った。

ミシシッピバブルの真の代償

- 欧州、とりわけフランスにおいて、銀行制度や株式会社制度に対する不信が根付いてしまった。
 - **南海会社の破綻**: 株式会社への不信、1720年、泡沫会社禁止法(1825年に廃止)
 - **ミシシッピ会社の破綻**: 株式会社と銀行への不信
 - 王政のもとでの金融システムへの不信は、フランス革命への導火線となったといわれている。
- **金融制度、とりわけ株式会社制度については、その発展の舞台が米国に移っていく。**
 - 独立戦争中(1775年から83年)に設立された証券市場
 - 当初は、新連邦債の市場
 - 1790年代に特許会社の株式の市場へ
 - 1792年、ウォール街すずかけの木協定、競売人の排斥
- **財務情報の公開**
 - 会計制度の整備
- **本位通貨の必要性** (👉6月29日、7月6日の講義)

文学としてのミシシッピバブル(1)

- やはり、「無から有の創造」(錬金術)は、人間には不可能であった。
- 王も、さすがに「公で語った返済の約束」を反故にすることはできな
かったが、「紙切れに書かれた返済の約束」は平気で破ることができ
た。(実は、王は、約束したことさえ知らなかった...)
- 大衆も、王の約束を見事に忘れることができた、いや、気づくことさ
えなかった。
- 言葉と貨幣の類似、あるいは、同値
 - 言葉のインフレ(根拠なき饒舌)と紙幣のインフレ(裏付けなき濫発)

文学としてのミシシッピバブル(2)

- しかし、「語られた約束」と同様に「書かれた約束」も、紙幣のインフレですべてを胡麻化することはできず、かなりを回収、あるいは、増価(平価切上げ)せざるを得なかった。
 - しばしば勘違いされるが、ローシステムの崩壊でハイパーインフレになったわけではなかった。
 - むしろ、物価高騰は、フランス革命前後で著しかった。
- 要するに、「紙切れに書かれた返済の**約束**」は、債権者(大衆)と債務者(王)の間で、公の場において口頭で交わされた**契約**とは性格が大きく異なるものだった。
 - 同じく、ファウストとメフィストフェレスの密室での文書による契約も、王の約束と同じものであった。

6月29日、7月6日は、鑄貨(コイン)に関する議論

- ローシステムのもう一つの目的は、経済における決済手段の不足、とりわけ、小口決済手段の不足を解消するところにあった。
- しかし、ローシステムでは、一時的でさえ、この目的で成果を上げることができなかった。
- 6月29日、7月6日では、決済手段不足には、鑄貨改革の必要性があったことを学ぼう！